

令和3年度 菊池寛記念館文芸講座



『源氏物語』の魅力

—紫の上の物語を中心に—

香川大学教育学部 北原圭一郎

紫の上との出会い（本文①）



- ・ 登場時の紫の上
 - 山里に住む、年齢以上に幼い、自由な少女として登場。
 - 藤壺の身代わりとして求められる。
- ※紫の上はどのような境遇の女性か？



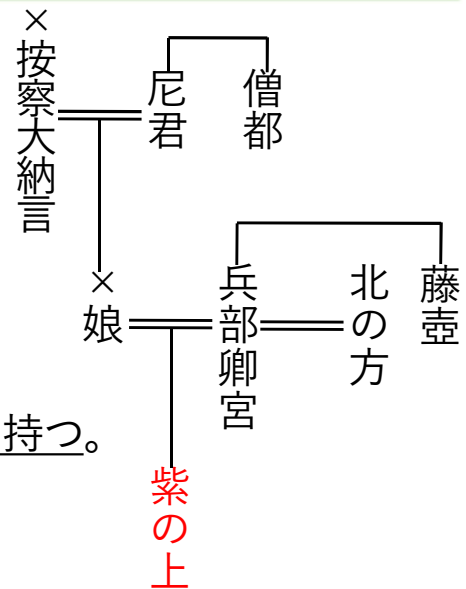
(土佐光吉・桃山時代・京都国立博物館蔵)

紫の上の境遇（本文②）



- ・紫の上の不遇な生い立ち
 - 母方の親族を亡くす。
 - このままでは実父・継母に引き取られて不幸になる。（継子いじめ）

※光源氏の引き取り = 紫の上救出の意義も持つ。



第一部の紫の上の物語



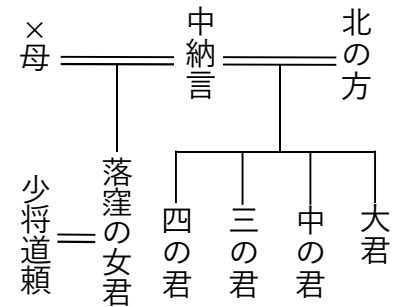
- ・身寄りのない不幸な少女（幸福な結婚を閉ざされた境遇）が、高貴な男性に愛されることで、安定した高い地位を築く。
= 『源氏物語』以前の物語の型を継承

(参考) 『落窪物語』



『落窪物語』 あらすじ

主人公の女君は実母を亡くし、継母（北の方）のもとで暮らしていた。北の方は女君を実の娘たちと差別し、床の低い部屋に住ませ、裁縫の労働で酷使するなど、虐待を続けていた。幸福な将来を諦め嘆いていた女君のもとに、道頼が偶然訪れるようになり、やがて救出され自邸に迎えられる。道頼は太政大臣まで出世し、女君は唯一の妻として幸せな結婚生活を送った。

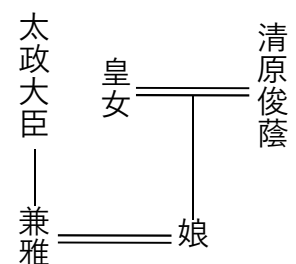


(参考) 『うつほ物語』 俊蔭巻



『うつほ物語』 俊蔭巻 あらすじ

波斯国に渡り仙人から秘琴を授かるという特異な音楽の才を持つ俊蔭に、1人の娘がいた。両親の死後、娘は頼る者もなく、荒廃した邸で貧しく孤独に暮らしていたが、偶然通りかかった兼雅に見初められる。その後、俊蔭娘は山奥の木のうつほ（洞穴）をすみかとするまで零落するが、兼雅と再会し引き取られて安定した結婚生活を送る。



第一部の紫の上の物語



- ・身寄りのない不幸な少女（幸福な結婚を閉ざされた境遇）が、高貴な男性に愛されることで、安定した高い地位を築く。

= 『源氏物語』以前の物語の型を継承

※紫の上物語の独自性

…晩年になってその幸福が失われる。

紫の上の苦悩の始まり（本文③）

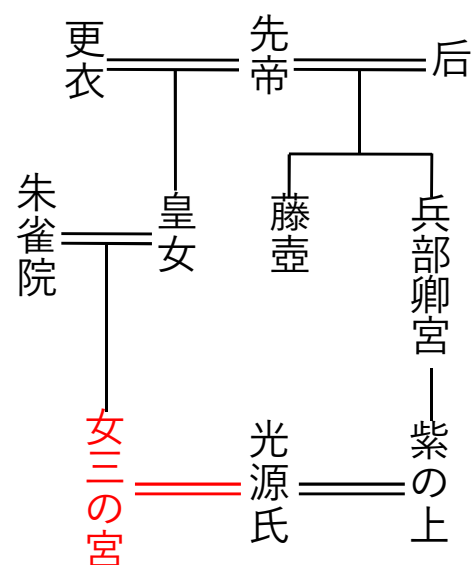


- ・紫の上の苦悩

= 女三の宮の降嫁により、光源氏の第一の妻としての立場を失う。

→ 男女関係・愛情の不安定さを自覚。

└ (自分の立場を支えていたもの)



紫の上の苦悩の深化（本文④・⑤）



- ・出家願望から発病へ

女三の宮 = 身内による強力な後見と社会的地位。



紫の上自身 = 光源氏の愛情以外に頼るものが無い不安定な境遇。
最後にそれを自覚して苦しむ。



昔物語の主人公 = 最後に幸せな結婚にたどりつく。

第二部の紫の上の物語



- ・不遇な境遇から男の愛で幸福を得るといふ、従来の物語の型を継承しつつ、その結末を崩すことで新しい物語へ。
- ・今までの幸福な地位を失うことで、その拠り所となったもの（=光源氏の愛情）を見つめ直す。
※再度の密通を経て過去の栄華を振り返る光源氏と対偶。